014315−001−9

特18−687

説教道之話（敬神訓蒙）後編

堀辺　昌雄／著

1冊（上19，51p
M26

ABB−0658

勅語

朕惟フニ我ガ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我ガ國體ノ精華ニシテ敎育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ヲ恭儉己ヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進ンデ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重ンシ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕ガ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

緒言

そも〳〵この勅語ハ明治廿三年十月三十日を以て世に下し給ふ所にして教育の大本を諭し給ふものなれは日本帝國臣民たるものハかあらずこれを仰ぎ戴きて遵ひ守らざるべからぢ臣愚鈍不學にして聖意の深遠あるいかでか親ひ奉るを得んされども天皇陛下の國家を思ひ臣民を導き給ふ大御心の深きに感泣するのあまり卿心に浮び出づるまゝを童子婦女子の爲に謹みて爰ゑ述ぶたゞ深く聖意にたがふを恐る四方の諸子幸に御示教あらことを偏に懇望す

明治廿六年六月

敬神訓蒙　説教道の話後篇目錄

上卷

教育勅語……一丁
教育勅語解一斑……三丁
第一　正直の德　心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神やまもらむ……一丁
第二　誠の德　田舍者のはなし……十一丁
第三　節操の德　白梅や雪の下にも花の意地……廿一丁
第四　寡慾の德　まどにさをつけよ……廿七丁
第五　慈悲の德　なさけは人のためならず……卅三丁

下卷

第一　信心の德　姑と嫁のはなし……一丁
第二　柔和の德　齒ハ亡び舌ハ存す……十四丁

第三　人の善惡　みどりある一つ草とぞ春ゝ見し秋はいろ〳〵の花にぞありける……廿三丁
第四　良心の教　難さをあせ神は汝を助け玉はん……卅三丁
第五　學問の德　無學の者はまことの信仰をなすと難し…四十三丁

教神訓蒙　説教道乃話後篇目錄　終

勅語解一班

堀澤昌雄　謹述

朕惟フニ我皇祖皇宗

朕とは天子樣が親しく御躬をさして宣はせらるゝ御辭にて。皇祖とは天子樣の御先祖にてまします神代の神々の御事。皇宗とゝ歷代の天子樣の御事をあらはす

國ヲ肇ムルニ宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ

此日本國を始めて御開きあらせたるゝ。伊弉那岐命伊弉那見命の二柱の御神にて。皇祖天照太神を以て此國の主君と定め給ふ。皇祖ゝ皇孫瓊々杵尊に讓り給ふ其時葦原の瑞穗の國ゝ吾子孫の君とますべきところと宣ひ又寶祚の隆なまさんこと天地とともに窮りなかるべしと宣ひしより。

君臣の分ます〳〵明かに國体尊嚴にして明治の今日まで幾千万年の間少しもかはることゝありませぬ。又天照太神の御世に初めて五穀及牛馬の

種を求め給ひ倚機織の道をも敎へ給ひて人民の着るもの食ふものゝ不自由なき樣安樂に暮さしめ給ふ。其後代々の天子樣にも深く下々を赤子の如く慈み育て。御殿の漏るをもおかまひなく年貢を御ゆるしあらせられて人民の困難を御賑し下され。又下々の貧民を深くあはれみ御思召あまり冬の寒き夜に大御衣を脫かせ給ひしなど。有りがたしといふも愚なことであります

我臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々其美ヲ濟セルハ臣民とは臣はけらい民はたみのことにて。卽下々をさして宣せらるゝ御辭であります。

天照大神が御位を天孫に御讓りあらせらるゝときに。君臣の分限を御定めあらせられ。又父子の道及先祖を祭るべきことをも敎へ給ひしゆへ。人民みな其理をわきまへしりて。君には忠義親にハ孝行を盡くし千万年の後までも忘るゝものはありませぬ。たまゝ〳〵ひはんを企つるものありても。これにくみするものもなければ遂に皆罪せられて一人として永く存するものはありませぬ。故に億兆心を一にして世々其美を濟せると宣はせ給ふ御こと、親ひます。

此我國体ノ精華ニシテ

上天子樣は深く民草をあはれみ育て給ひ。下人民ハ皆心を合せ一体となりて君に事へ親に事へ幾千世違ふものなきハ。國体の精華とて我國からのうるはしく秀でたる立派な花となりて外國人の羨み望むところである。宣はせらるゝ御意なりと親ひます。我國は君臣の分限こそ嚴然と立ちてあれ同じく神代子孫にてありますれハ。日本國ハこれ一家にまて天子樣は萬民の父君にわたらせ給ふなり。故に其間柄は外國とは大ゐに違ひまして。彼の隙もあらばと互ゐにらみ合ふて居る樣な水臭ひ間柄とハ同日の話ではありませぬ。誠に世界に例なき國がらなれば。國民たるものハ益こゝに氣を付けて國のねうちをおとさぬ樣にせねばありませぬ。

教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

人民の克く忠に克く孝あるべきは教育のもとである。と宣ハせらるゝ御意なりと窺ひます。人々父母に孝行すれハ其家能く治まり天子様に忠義をすれは其國永く治まることは申すまでもなきことなれは。人を教へ育てるの道は此義を教ゆるを以て第一の務とすべきことであります。然るを世の中にハ教育とハ智識を研き藝術を授くるを以て十分とする人があります。これは大きなる思ひ違ひで、如何ほど智恵ハさとく藝はすぐれたりとも。君に忠あらず父母に孝あらざるものは人でハあくて禽獸に同じ。故に忠孝の道は片時たりとも忘れぬ様心懸ねばならぬことであります。

爾臣民父母ニ孝ニ

爾臣民とは下人民をさして其方どもと宣はせらるゝ御辞であります。凡世間の人は貴きも賤きも皆其父母より生れぬものはありませぬされば

父母は我身の本であります況てや我身成長するまで晝も夜も艱難辛苦して育て下されたる其大恩は何に譬へ様もありませぬ。此恩は報ゆるの道が即孝行であります。人々少し他人に世話になることがあれはすぐに禮をいひますのみならず何か品物でも持て行き必其恩に報ゆるでありませう。然るに父母の恩は前にも申す通り。何に譬へ様もなく高き山も深き海も及ふことはできませぬ。此大恩いかでか力の及ふ限りは報はずに居られませうか。殊に此道は神代の昔し皇祖天照大神の御教へ給へる處あれハ。日本國民たるものは必務めねばならぬことであります。然るに此頃に至り或る人は父母の恩は輕く子は父母に孝行をせぬともかまわぬなどいひますが實にあさましきことであります。かく申す人の口ハ誰が恩によりて出來たるものでありませうか。まことに人面獸心とも何とも申しやうのあさ人であります。

今上天皇陛下にも大に此道に大御意を用ひ給ひ。承るところによれハ此

度御内廷費より年々多額の金を製艦費に下し給ふに付ては。何角に御節儉の處殊に臣下より仰せ出さるゝには。御母皇太皇后陛下の御まかなひ向き。及御先祖を御祭りのことゝは十分丁寧にせよとの御辞であります。誠に尊く有りがたきことであります。

兄弟ニ友ニ

父母より次で我身のことを思ひ我身の便にあつてくれるものは兄弟であります。兄弟は形こそ分れてゐますものゝ、同じ父母より生れたるものでありますれば。もとこれ一つの體にて譬へは木の幹ゝ父母にして四方に分れ出でたる枝は兄弟の樣なものであります。故に兄姉は弟妹をあはれみいたはり。弟妹ゝ兄姉をうやまひ共に心を協せ力を合せて君に事へて忠を盡し親に事へて孝を盡すべきことであります。又兄弟ゝ幼き時から同じ家に住み。食する時ゝ膳を同ふし寢ぬる時は褥を同ふし親しきこと此上はありませぬ。然るに世よゝ財産の故を以て大切なる兄弟を捨て互

に仇敵の樣にするものがあります。此等はわれと我身を割く樣なものゝ。誠にあさましきことであります。

夫婦相和シ

夫はかつと婦はつまにて。相和しとは互に睦くすることであります。凡そ人の家の繁昌すると破れるとは。皆これ夫婦の中の善きと惡しきとに基するものであります。夫は婦を扶け婦は夫にしたがひて。各其職分を怠らぬ樣にせねばなりませぬ。職分とゝ役前と申すことにて。夫ゝ外に出でて人と交り種々の務をなして活計の道をはかり。婦は内にありて食物の調理裁縫の業を務て能く其家を守り。何事をなすにも猥に自分の心のまゝよせず。必夫に尋ねて後する樣にして居たれば。其家益々富み榮へ延て其國の榮へにもなりおのづから忠孝の理にかなふことは疑ひありませぬ

朋友相信シ

朋友とはともだちのことにて。相信じとはうそいつわりなくまことを以て交れはと宜はせらるゝ御辞であります。ともだちとゝ如何なる人かと申しますれは。卽ちわが爲になるわが忠孝の道を行ふ助けになる人をさして申します。世の中にゝ僞友といふが澤山ありて。只利の爲慾の爲に信らしく見せかけるものが多くあります。これ等の朋友には決して交りてありませぬ。殊に君に忠ならず親に孝あらざる人は片時も交りてはむりませぬ。朱に交れは丹くなるといふことがあつて。善き友に交れば善き人となり惡しき友と交れは惡しきものとなるゝ。丁度水の入るゝ器に隨ひて圓くもあり四角にもある樣なものであります。故よよく我爲にあり我忠孝の道を行ふ助けにある處のまことの朋友と交り。其友のためには身を惜ます親切にすべきとゝであります。

恭儉已ヲ持シ

恭うやゝしといふことにて已が身を慎むこと。儉は入用をはとよくするといふことにて儉約することであります。常に身を慎みへりくだりて人の道を守りて居たなれは我身安樂に。入用をはゞよくして濫に金錢を費さゞれは家必富み榮へます。若身をたかぶりて謹みなければ必身を害し。儉約せずして濫に金錢を費すときは家を亡ぼすこと眼前であります。故に此恭と儉との二つは人間一生涯吾身を持するの最大切なるものであります。此度天子樣には我々人民をまもる軍艦製造費として。年々多額の金を御下しあらせらるゝに付ては。萬事十分御節儉あらせらるゝことになりましたゝ前にも申す通りであります。我々臣民たるもの之を隨て儉約せずに居られませうか。

博愛衆ニ及ボシ

博愛とは博く愛するといふことにて人を愛しあはれむ心のひろいことであります。凡人として愛の最切なるは父子兄弟夫婦の愛に上こすものはありませぬ。故に父子兄弟夫婦の愛を盡して後其愛の心をひろめて他

人に及ぼすべきことであります。然るに世にハ父母兄弟妻子を捨てゝ他人と親切にするを以て博愛と心得るものあり。これは顚倒とてなすことがさかさまにあつてゐます。丁度自分の家を捨てゝ置ひて他人の世話をやいて居る樣なものであります。必ずや近きより遠きヱ狹きより廣きに及ぼすべきことなり。これ物の順序であります而してその順序は親疎によつて定めねばなりませぬ。若し又博く愛するの道なりとて畏くも我天子樣を他の國の王と仝樣に思ひなば我君を愛する心がうすくなりて遂には不忠不義のものとなり。又我國を外國と同じ樣に思ひなば。我國を愛する心がうすくなり。遂には我國をも外人の手に渡す樣な賣國奴となるもはかられませぬから最氣を付ねばならぬことであります。

學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ人にハもつて生れたる智德があります。けれども學はず習はずしては人道を明にし業を覺へるものはありませぬ。故に學を修め業を習ひと宣ハせ給ふことゝ存じます。さて人として如何はど智惠があり業がすぐれたりとも德器と申して德義と器量とがなくば其智能技術も用ゐるところハありませぬ。故に智能を啓發し德器を成就しと宣ハせ給ふ德義とは人をなつけること器量とハ人を容るゝこと即量見のひろきことであります

進ンデ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ

人の學を修め業を習ふはたゞ我一身の爲にすべきにあらず。必國家の公益をなし世の業務を開くことヱ心を用ゐねばなりませぬ。公益とは已れ一人の益にあらずして衆くの人の利益にあること。世務とは一時一事の務めにあらずして世の中のことにひろく關する務めを申します人如何はど學藝がありましても。わが身の利益をのみ求めて外の害になり多くの人の妨にある樣なことありては人の人たる道ではありませぬ。代々の天子樣には或ハ外國に留學生を遣して種々の學藝を修めしめ。或は外人

を招きて種々の技術を傳へさせ給ふ。皆これ公益を廣め世務を開かせ給ふ御思召誠に有かたきことであります。古より我國は巧藝に巧にして手工に長じたる國なれゝ益勉めて美術國の名を何時までも外國に輝し或は我國になき物品機械を製造て外國よりの輸入を防ぎ。或ゝ新機械を發明して國益をなす等のことは。我々人民の正に務むべきことであります

常ニ國憲ヲ重ンジ國法ニ遵ヒ

わが天子樣よはわれ〳〵臣民を安からしめ給はんとの御思召より。明治廿三年二月十一日を以て憲法を世に下し給へりこれをば國憲とは宣ゝ給ふ。此憲法は皇祖皇宗の御遺訓と古より我國の成立とよ基づき深く慮り給ひて定め給ひしものなれは。實よ我國の礎であります。故よ我々臣民たるものは之を重んじ大切にして戴き奉るべきはもとよりのことであります。然るに世には此最尊き憲法に對し兎や角いふ人あるよし。これ

は我國の礎を動さんとする大惡人であります。次に國法とは法律のことでありまして。これ亦御名を以て仰せ出さるゝことなれは遵ひ守るべきゝもちろんのことであります。

一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ

一旦とゝ若しもといふこと。緩ゝゆるやか急はいそぐことにて緩急とつゞくときゝ急の字が重くある。若しも非常の軍事があらばと宣はせらるゝ御辞と存じます。今日は太平の御代人々皆腹鼓うち安樂に暮して居ますけれとも。何時國内に謀叛するものあり外國より寇を來るものあるもはかられませぬかゝるときには身をすて命をすてゝ我大君のため我國のため。陣刀を腰に付け鉄砲を肩にして勇ましく戰場に向はねはありませぬ。我國は氣候中和にして暑からず寒からず。五穀よく稔り諸の動植物生長し衣食住何一つ不足なき國なれば。四鄰の強國これを窺ふこと片時も絶ゆる間がありませぬ。我方に少しでも隙があれば必來り寇すること

は鏡にかけて見る樣であります。然るに敢て寇し來らざるのみならず。三韓渤海肅愼等の國より貢せしことありしは皆國民の義勇に富むからであります。實に義勇ハ國を守るの元氣でありますから太平の世なりとて油斷せず。義勇の心をはげまして怠ることはなりませぬ。

以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ

今日われ〳〵の戴くところの天子樣ハ。天地の開くる初めよ此國の君主と生れ出給ひ。此國土をひらき此人民を生み給ひたる御神の御正統にてましませば。此國及民と共に何時〳〵までも傳へますべき御位なること勿論であります。此御位を天地と等しく。何時〳〵までも守り奉るべきは。人民の忠義であります。而してこの天壤と窮りなき皇運を仰ぎ奉る人民ハ。皆皇祖皇宗に忠義ある臣民の子孫であいものハありませぬ。故に行儀を愼み德業を勉めて此皇運を益輝かさねばなりませぬ。

斯ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ汝祖先ノ遺風ヲ顯

彰スルニ足ラン

前條に宣はせらるゝと〳〵を臣民おの〳〵克く盡し克く行ふべきは。獨天子樣の御爲めに忠良なる臣民たるたけでハない。臣民各の祖先のよき行をあらはすものにして。先祖の爲めにも孝行なりと宣せらるゝ御辭ありと窺ひます。われ〳〵の祖先は代々の天子樣を戴きて忠を盡し能く其國を守り。今日まで外國人の侮をだに受けしことなき我神國われ〳〵の世よなつてそのねうちをおとしなば。君に對して不忠の臣民たるは申すまでもなく。祖先の面汚しをするわけでありますから。よく〳〵此御辭を胸に納めて暫くも忘れてはなりませぬ。

斯道ハ實ニ我皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ導守スベキ所

斯道とハ前條に宣はせ給へる忠、孝、友、和、信、恭、儉、博、愛、公、益、義、勇等をさして宣はせらるゝ御ことを窺ひます。而して之を要するに忠孝の二字に外ならず。實に此忠孝の道は皇祖皇宗の御遺訓に基し。神代の古より今日まで

傳へ來れる大道にして。決して他國より傳はりたるものにもあらず。又儒者宗教家などのいへる想造のものにもあらず。日本臣民たるものは必遵ひ守るべきのことであります。

之ヲ古今ニ通シテ繆ラズ中外ニ施シテ悖ラズ

皇祖皇宗の御遺訓に明かなる忠孝の道は。神代の古より今に至るまで幾千年の間此日本國に通じ行はれて少しも繆ることなく。又之を內國に施して善く行はるゝばかりでなく外國に推しても少しも差支へることはありませぬ。凡そ世界の教へは種々ありますけれども。忠孝の道を以て本としたるものでなければ我國には用ゐられませぬ。然れども君主なきの國はなく父母なきの子はなきものであれば。此教は何れの國に於ても必行はれぬ所はありませぬ。

朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

現神と稱へ奉る天皇陛下が畏くも我々臣民と心を一にして皇祖皇宗の御遺訓を守り此大道を敷き弘め。我國の美德をしてます〳〵光輝を發せしめんと庶幾はせ給ふ。御仁德の厚き御思召のふかき有りがたしといふも中々愚かなり。

勅語解一班終

敬神訓蒙 説教道の話後篇上之巻

平安教會理事　堀邊昌雄著

心たに誠の道にかなひなは
祈らすとても神やまもらむ

（正直の德）

これは　古人が　よみました　名歌で　ございまして　歌の心は　人間と　いふものは　まことが　あければ　あらぬ　誠の道に　かあふたことなれば　神様ハ　祈りませいでも　かならず　おまもり　下さるといふ　心を　よんだ　もので　人は　まことの　こゝろ　まことの行ひ　まことの言　あんでも　かでも　まこと　で　なければ　あんらくに　くらす　ことが　できませぬ　あんらくに　くらしてゆけぬ　だけで　ございますれば　よろしいが　神様の　おしかり　を　うけて　ついには　みハなして　おしまい　なさるかも　ヒかりません　何程　ゑらいお人でも　かしこい御方でも　神様に　みはなされましては　生て

ゐるかひ　が　ございますまい　かと　存じます　デスから　人は　な
んでも　まこと正直で　あければなりません　まこと正直と　申すもの
は　泉の水の　ように　ございまして　めつたに　かれたり　つきたり
いたしませぬ　二時の計略は　夕立の時　たまつた　あまだれの水の
ように　じきに　かれたり　つきたり　いたします　誠のとくい　い
つまでも　つゞきます　けいりやくの　とくい　とても　ひさしいこと
は　ございませぬ　商人衆が　ばちものを　うりつけて　アアアア　も
うかつた　と　いふて　よろこんで　ゐます　なるほど　もうかつたに
ちがひございません　が　これは　しんじつ　もうかつた　ので　で
ざりません　ぬかよろこび　で　ございまして　しまい　に　信用を
失ひ　まして　外の店より　良い物を　やすく　うりましても　モウ
誰も　買ては　くれませぬ　大工さん　でも　壁屋さんでも　誰でもか
れでも　まことで　なければ　あります　ません　いつはりと　申します　も

のゝ　あさましい　もので　一ッの　うそを　かくそう　と　いたしま
すれば　百の　うそ　を　申さねば　なりません　百も　いつゝり　を
申ますと　きつと　つじつまの　あはぬ　ことが　でき　ます　して　い
つはり　じや　といふ　こと　を　見出されます　むかし　支那よ　周
幽王と　申す　天子が　ございまして　この天子の　おささに　褒姒と
申　御方が　ございました　この褒姒と　申す　おかたは　なか〳〵の
美人で　幽王の　御寵愛も　なみ〳〵で　ございませんだ　が　ど
うした　ものか　この　褒姒と　いふ　御方ゝ　笑ふ　ことが　きらい
で　外の　人が　腹を　かゝへて　わらふ　ような　ことでも　ちつと
も　わらはぬ　といふ　ので　幽王も　どうも　氣がすまん　と　見へ
ました　一体　女と　いふものは　やさしい　て　ものやわらかな　の
が　女のとく　といふもので　あまり　大な口を　あいて　げた〳〵
とわらひ　ますのゝ　よろし　ございませぬ　けれども　どうもいつも

つんとして　ゐるのは　ようでございません　にこ〳〵と　人が見て
あいくるしい　にこやかな　御方　じや　といはれるようにせねば　な
りません　ソレヂヤ　と　申して心が　おそろしい　て　かは　ばかり
　まこやかな　は　いけませぬ　心も　かはも　やさしい　なければ
いけません　サテ　幽王は　おきにいりの　褒姒が　なにを　いふて
も　どんな　ことを　しても　にこッとも　いたしません　から　どう
なりと　して　褒姒を　ひらはせたい　といろ〳〵　かんがへ　あさ
り　ましたが　この　幽王の　時分には　大名が　ございまして　萬一
みやこま　わるものが　できて　王さん　をせめる　やうな　ことが
あります　と　のろし　と　いふて　今　の　はあびの　ようなもの
を　あげて　大名たちに　しらせます　大名たち　は　その　のろし
を　みると　すぐ　兵たい　を　くりたして　都へ　たすけ　にゆ
く　と　いふ　きそく　に　して　あります　から　幽王は　この事を

おもひだして　わるもの　も　なんまも　ないのに　のろし　を　あ
けます　スルト　大名たち　は　この　のろし　を　見る　が　いなや
ソレ　大變じや　天子様　に　あだするもの　が　できたゞ　と　み
な〳〵　兵たい　を　くりだしまして　吾一　に　と　かけつけ　ました
が　もと　この　のろしを　あげたのは　褒姒　を　笑はしたい　ば
かり　で　あぐさみ半分に　した　こと　です　もの　あだも　わるも
の　も　あらふ　いづ　がござりませんから　せつかく　走せつけた
大名たちも　汗水　たらして　出て　まゐつた　甲斐　も　なく　みな
〳〵　はりが　ぬけて　しまい　まして　互に　勢のない　かは　を
見合せて　ゐられ　ます　このあり　さま　を　褒姒が　見まして　オ
ホ　ホ　アハ、　と　こけぬばかり　よ　わらひました　幽王い　褒姒の
わらひましたの　を見て　この上も　なく　よろこばれ　ました　き
のどくな　は　大名たち　です　幽王に　あぶられて　はら　は　たち

ます けれども 天子様の ことです から 何の ふさいもなく す
みました が この いたづら を 神様が 目を ねぶつて 見ずに
御座らう はづ は ございませぬ そののち 犬戎 と 申す 夷
るもの が みやこ を せめ ました 幽王は すぐに のろしをあ
げて 大名たち を よばしやり ました けれども 大名たちは な
た おささき の おなぐさみ じや と おもひ まして だれひと
り ゆくもの が ございませぬんだ 幽王ハ いろ〳〵 しんぱい
なさりまして たび〳〵 のろし を あげさし ました が だれも
まゐりません から 幽王は おいたわしいこと ながら ついに
犬戎に 命を とられて しまわれ ました といふ はなし が で
ざり ます が 大名たち が のろしを みながら 知らぬかは し
て ゐます のハ いけません けれども 幽王が まこと のみち
を ふみハづされた からして こういふ こと に あります 又

幽王ハ 大名たち が 小言を よういハぬ と おもひ いろ〳〵
の いたづら を なさり ました から なはさら 神の おしかり
を うけた ので あらう かと おもはれ ます 吾神國に おき
まして ハ その ような 非道な 天子様 ハ 三千年の 長ひ あ
いだ に ございませぬハ 吾人 神國の 人民 たる もの ハ み
な よろこば ねば なりません 又 御一新の後 茶が 西洋へ う
れだし ました とき 西洋人ハ めづらしい ものです から ずい
ぶん よい ね で かいました もっとも 西洋人 は 茶の よし
あしをよう 見わけません これを さいはいに いろ〳〵の ませも
の を いたしました から 西洋人 も さとりまして 日本茶ペケ
ペケ と申 まして 買ひませず 一時のとくを とろふ として 計
略にかけ おもひも よらぬ 大な そんを いたしました はじめて
うれた ときの ねだん と たゝいまの ねだん とハ よほど

のちがひでこざりませうコレハ私が申すまでもなくみなさまでしようちかとそんじますちかごろ或るしんぶんでみましたむかしの証文どうもかんしんいたしましたその証文へこうかいてあります

一金五拾両也

右者此度入用に付借用申處實正也然る上は八月三十日限屹度返濟可仕候萬一日限に返金不致候節は御わらひ下され候とも一言の苦情申間敷爲後日証文如件

どうてすどあたもいかゞおかんがへなさりますかむかしの人の義のかたいのへじつにかんしんなことでございませんかたゞいまのよも義理のかたい正直な人も澤山ございますけれども又首とかけがへの印形をおし印紙まではりまして かへせもどしたと大もんちやくしまいには裁判沙汰

こういふ人も澤山にございますがまことになげかはしいことでございませんか前にも申ましたとをり人は誠ですから誠の道を守りましてこそ神様は御守り下さります神様の御守り下さるやうにしやうと思ひますればまことのみちをまもらねばなりませぬせけんにはこの歌をこだてにしまして神信心する人をわらふてナニ神しんじん？神しんじんみたよふなことをせずともまことでさへあれば神はまもつて下さるといふ人がございますがまことのみちをまちがひなしにふみ行ふ人へ人ではないかみ様です ナルホド人間といふものへ智恵もふんべつも澤山ございまして萬物の長と申すくらいのものでございますけれども人のすることいふことおもふこと何一としてまことのみちはづれてないまがひないといふことは

できませぬ　そうして　人間と　申す　ものは　強そうなもので
ございますけれども　けつして　つよい　ものでハ　ございません　ナ
ぜ　と申すに　人ハ　みな　その　すき　きらひ　の　ものごとに　心
を　みだされまして　どうしても　正しい道　を　行く　ことが　てき
ません　もので　よの　たとへ　に『ぼうず　にく　けりや　けさまで
にくい』と　いふ　ことが　ございまして　ぼうさま　は　ぼうさ
まけさ　は　けさ　です　けれども　心が　みだされて　なにも　し
らぬ　けさ　まで　が　にくう　なります　といふ　のは　なぜ　で
しよう　卽人の心が　にくいといふ　心の　ため　に　みだれて　こん
な　ことに　あるので　ございます　ましやう　むかえから　大豪傑と
いはれ　ます　人たち　ハ　みな　凡人より　心の　つよい人で　あり
ます　けれども　すき　きらい　の　爲　に　心を　みだされまして
あんでも　ない　ことを　おこつたり　よろこんだり　いたします

ことは　たくさんに　ございます　只　神樣は　決して　みだれる
と　いふ　ことが　ない　コレが　卽ち　神と人との　わかれる　とこ
ろ　じや　ないか　と　思ひます　かように　よわき　人の心を　ど
うして　いつでも　つよく　して　正しき道　を　ふむ　ことが　で
きる　か　と　申ます　に　せひとも　神樣　の　御たすけ　を　ねが
はねば　なりません　つねに　神樣　の　おしへ　に　そむかぬ　神
樣　が　いつも　御照覽　あさることを　をすれぬ　よふに　いたし
ますれば　心が　しせん　に　つよく　なります　心が　つよう　あら
うと　思へば　神樣を　信仰　せねば　なりません　けつして　この
歌で　神樣信仰を　うちけすことゞ　できません　かへつて　神樣を信
心する　心を　一層　たしかに　いたします

（誠の德）　田舍者のはなし

一人の旅人が　ございまして　よはゞ　かけはなれた　ゐなか　へ　ま

をりました が どうも へんな こと には その 村中の 人の かはいろ が なんとも いへぬ くろさ で たれ 一人として いろの しろい すきやか な かは を して います もの が ない そこで 旅人 が あやしく おもひまして おまへがた は なぜ そんな かはを して ござるのです チト 失禮です けれども となた も なんとなう くすぼつた かはを して ござるは なぜです か と たづね ました ところ が 村の人たち が 旅人の いろしろく すきやかな ようす を 見まして 其間に こたへるところか かへつて 妙な とひ を いたしました 何と 中々 すか と いへば おまへ は よなべ を しなさつた こと は あるまい その かはの うすじろい は なんでも 夜業を せずに 日が くれる と すぐ に ねて しまい なさる よふ な かはいろ じや つまらぬ なまけもの じや・と わらひ

ました 旅人 は ふしぎ て ありません ナニ わたしの かは が よなべ を せぬ かは じや とは どういふわけです わたし は 大抵 夜中ごろ まで よなべ を します が と 申ます と イヤうそ〳〵 まいばん よなべ して そんな うつくしい かは まて ゐられぬ 村の 與太郎 が あんばい わるくて 半月ほど あそびよつたら おまへ の よふ な かは に なつた おまへ さん の かは は どう して も よなべ を せんかは じや と 申.ますから 旅人も ふしぎ に おもひ まして どうも よなべを したら かは が くろう ならにや ならん と いふ わけ が わからぬ から よなべ の よふす を見よう と おもひ まして 村の内で とめて もらひ まして 見ます と 村人 の いふ とをり 夜業を いたします と かは が くろう ありますのも 道理 デス 又 黑ならねば ありません 旅人も 手を 打て な

るはど　あるはど　これは　くろく　ならねば　ならぬ　ワイ　と　申
ました　それも　そのはづ　です　あんぢん　も　らんぷ　も　とぼさ
ず　に　松のじん　を　もやして　家内中　が　その　ふちぐるり　で
夜業を　いたします　の　で　たまつた　もの　で　ございません
松のけぶり　が　ムラ〳〵　と　たちあがります　その　松烟が　手
足目口鼻の　差別　なしに　くすべたてる　のです　一日や　二日あら
とも　かくも　まいばん　まいばん　の　こと　です　もの　いろ
の　くろい　のも　むり　ハ　ございません　この　有様を　見て　旅
人は　いかに　田舎　とは　いひ　ながら　らんぷ　や　あんどう
の　ない　はづ　ハ　なからう　に　と　おもふ　てたづね　ます　けれども　一向　に　しらぬ　あんばい　です　から　明る日　村の人ら
に　むかひ　まして　いかまも　よあべ　が　かは　を　くろく　する　わけ　が　わかり　ました　しかし　アア　いふ　こと　を　して

は　大きに　からだ　に　害　ある　と　いふ　ヨけ　を　いろ〳〵
と　いひきかして　ちんぷ　や　あんど　と　いふ　もの　は　こん
あ　もの　けつして　くすばらぬ　と　いふ　わけを　はなし　して
きかし　ました　村人　も　ふしぎ　ま　おもひ　ました　が　旅人
は　いかにも　きのどく　に　思ひ　まして　らんぷ　を　おくつて　や
つて　文明の　めぐみ　に　あハして　やりたい　と　おもひ　こ、
を　出立　いたしました　のち　に　らんぷ　三ツと　石油　二箱　は
ど　わざ〳〵　おくつて　やりました　この　旅人　の　いたします
こと　は　まこと　に　かんしん　あ　こと　で　だれも　こういふ　こ、ろ
がけ　に　なりたい　もの　で　ございます　サテ旅人は　うち　へ　か
へつた　のちも　村人　の　こと　が　氣に　か、りまして　まづ〳〵
よいこと　を　した　これも　神の教を　まもる　ゆへ　じや　よい
こと　を　さして　もろうた　さだめて　いまごろ　は　一所に　よつ

て よろこんで ゐるで あらう いつぞは 又 あの村へ いて
見よう と おもふ て をりましたが さいはい よき おりが
ござりまして さきの むら へ ゐて みましたが さても さ
ても ふしぎあことには 村の 人が あい も かわらぞまつくろ
な かほ して ゐます から 旅人 も おどろき まして もう
このよふ に くすぱつて ゐる はづが あい つもりじや に ナ
ゼデ あらう と おもふ て さきへ とまつた内へ 行き まし
て ようす を 見ます と あいもかわらず 松を たいて ゐる
ようす です から ナゼらんぷを とばさぬ か とたづね まし
たら ナニ らんぷふのような もの ハ まつくら で よなべ も
なんにも できや しません あんな ものハ なんにも なりません
あんな つまらん ものは あい と ハち の たつ ようない
ひよう です 旅人 は 案外の ことです から あんまも いハず

棚のすみ に くすぱつて ある らんぷ を きれい に そうぢ
して 村人に たのむ ように す、めて 今夜は 松をやめて らん
ぷ で よなべして 見なされ らんぷ の あかさ は かくべつ
じやと まうしました が 村人 は なんの また 一トばん そん
じや やめじや〳〵 と いひます のを いろ〳〵と す、めて 村
人の らんぷ を つかふ ようす を 見ました が 村人ら は
また 一トばん そんに ある とか あんとか ブツ〳〵 つぶや
きながら その らんぷ を しでとば の まんなか へ おきま
して 申ますに ナント 旅の御方 こんな くらい のに よなべ
が できますか あんたの いひあさる とをり この くさい油を
一ぱい いれて あるのに まつくらじや こんな ものが 松の か
はりに なりますか と りくつらしい 申ます 旅人ハ この よう
す を 見て ソンナラ いつも こうして らんぷ を あかう あ

いらんぷは くらいと おもふて ござる のか それゝ大きな まちがい です なんぱ らんぷ じや と申しても 心のところへ 火を つけねば あります せん 油を いれて それなりでおいては とても あかく は なりません こふします ゝじや と いふて火を とぼし はやを さして 見せました サア 明かいあかい なか〳〵 村人 の おもひの 外の あかさで 松ぐらいは とても およびません 村人も ゝじめて がてん が まゐりました とみゐて 手を うつて かんしん いたしました ソレも そのゝづです 村人 の おもひました のは らんぷ と いふ もの は ぴか〳〵 ひかつて ゐらい けつこう な もので 油さへ 入れて おけば あかう なると おもふて 火を つける と いふ こと を しりませぬ から けつこうな らんぷ を もらうても かへつて ふそく を いはにや ならん ようにに なりました の

で ございます こういふ まちがうた 御方が よの中に 澤山で ざります かと そんじ ます 神様の教は けつこう な ものじや と ばかり きいて なんでも ねがふ たら おきゝ 下さる と おもひ みちならぬ 行をして 神様の おたすけ を うけふ と おもふ人 が 多く 中にゝ ばくち を うちまして いつもかて る ように おまもり 下され とか おや兄弟の しんぱい もか まはず いろ に まよひ あの男と 添へるように とか あの女の 心 が かゝらぬ ように とか いろ〳〵 神様へ むり を申 あげ て おもはく どをり に ならぬ と ブツ〳〵 小言を 申 まして ア、神様も 聞へませぬ この くらひ 茶絶 しをだち な どして 月よ 一二度 ゝ 屹度 さんけい して ゐるのに サテモ 神様も さこへぬ 御方じや と いふ で かしたもの かやして もらへぬとき の ような こと を いふてゐる人 も ござり

ます　そうな　コレは　ちんぷ　の　火を　つけんと　ア、　ちんぷは
くらい　ちんぷ　は　くらい　と　いふ　のも　同じことで　神様の
御助が　はしいのなら　心から　直さにや　なりません　神は非禮を
受け給へず　と　いふ　て　道に　はづれた　こと　を　願ひ　まして
も　決して　おきゝ入は　ござりません　かへって　馬鹿あ　やつじや
と　おしかり　なさるで　ござりませう　神様は　全智　全能　と
いふて　なんでも　ごぞんじないことはない　おかたです　から　ヨれ
ひとを　あはれみ　たまい　まもり　くださって　いろ〳〵　けつこう
な　ちんぷより　もつと　けつこう　な　もの　を　さづけて　くだ
さります　が　人の心に　まこと　と　いふ　火を　つけませぬ　とき
ハ　下さった　かひも　ない　ことで　それを　しらずに　神のような
もの　を　しんじん　して　も　やくに　たゝぬ　と申ます　が　あに
も　神様の　おわるい　のでも　なんでも　ない　つまり　おのれの

しんじん　まこと　が　ないのです　御同然に　まことの　道に　した
がい　とうとき神　のみめぐみ　を　うけて　あの　ちんぷ　の　つ
かひかた　を　しらぬ　に　ふそくいふ　田舎もの　と　ならぬよふ
に　かんがへ　ます　のが　かんよう　で　ござります

（節操ノ德）　白梅や雪の下にも花の意地

これは　むかし　赤穗の忠臣　四十七士　の　中の　一人　大石源左衛
門の妻女が　おつと　の　かどで　の　ときに　かいて　おくりました
句で　わづか　十七字　の　中に　何とも　いへぬ　ふかい意味が
ござります　から　この句　を　だい　と　いたしまして　御話いたし
ましよう　世の中に　白い　ものと　いへば　雪はど　白い　ものは
ござりませぬ　しらうめの花　が　なんぼ　しろう　ても　雪の白さ
にハ　とても　くらべもの　には　なりません　イヤ　寒中の　さぶさ
を　おそれず　しも　にも　たゆます　ささそめ　ました　白梅が　ま

つしろ　ゐ　ゆき　の　下に　おさへられ　まつしろな　ゆき　が　梅の　こずゑ　に　つもりまして　花の　よ　う　に　なりました　日に　は　うつくしい　しらうめ　の　花　も　ナカ〳〵　花の　いろは　ざ　りませぬ　白さ　ハ　雪に　おとり　うつくしさ　は　ゆき　に　おと　り　一りん　二りん　さきだし　ました　白梅　は　花と　見ちがへる　多くの　ゆきばな　に　かつ　ことが　できませぬ　サテモ　きのどく　な　は　しらうめ　です　ゆき　の　ために　色を　うばはれ　ました　雪のために　人のあい　をうしなふ　で　ざりまえやう　アア　梅の花　ハ　雪と　いふ　もの　の　梅の花　は　花の君子　花の君子　と　むかしか　ため　に　ふみつぶされます　花は　ゆきの　ため　ま　わや　に　ら　はめらるゝ　しろうめ　の　しられ　ました　シカシ　しらうめ　は　こんな　事　ぐらい　に　と　んじやく　いたしませぬ　ゆき　が　いくら　白う　て　も　ゆきが

いくら　澤山　はな　の　やう　に　なりまして　も　梅　やはり　梅　です　花の君子　です　しらうめ　は　とんじやく　しませぬ　しらうめ　は　ゆき　と　色の　しろさ　を　あらそひ　ませぬ　しらうめ　ハ　ゆき　と　うつくしさ　を　あらそい　ませぬ　えらうめ　ハ　ゆき　の　ために　人　の　あい　を　うしない　ませぬ　ゆき　は　どうしても　しらうめ　を　まかす　ことが　でき　ませぬ　ナゼ　でしやう　しらうめ　の　しろさ　は　ゆき　に　及び　ませぬ　けれ　ども　梅のにはひ　が　ざります　ふん　ぷん　たる　よき　よはい　が　ざります　ゆき　が　いくら　ひやゝかに　いくら　まつしろ　よ　多く　つもりまして　も　梅の　かをり　を　うちけす　ことが　できません　ゐんば　しろい　ゆき　でも　梅の　にはひ　を　でま　かす　ことは　できません　コレ　卽ち　花の意地　では　ざりま　せん　か　これが　梅の　ねうち　ある　ところ　で　ざりません

かわれ〳〵の神のをしへもやはりしらうめのごとくイヤ一だんも十だん百だんもたかく外からあらそはれぬところがございますからいろ〳〵の宗教いろ〳〵のがくもんがゆきのごとく右からついたり左からおしたりいたしますけれども雪になやまされたうめのにはひはげしいように日に月にさかんになりますのはをしもつきもできぬわけがございましてとうとき神さまのをしへが破竹の勢で東西南北まひろがり三人五人十人百人と信者もふへましてすゝめませんけれども加入してひとりでにさかんにありますのは御互によろこばしいことでございませんがまよひのを霧の中にゐる人が神のをしへによりましてまよひをとくようになる人人のふへるのはまことによろこばし

いことでございませんか我日の本の國柄は三千年のむかしより神のみくにと申しまして くさばの上のつゆはども外國のあなどりをうけましたことのない世界にヤーッとない國で東海の君子國といわれたこの神國まゝ神國の意地がなくてはありませぬ・イヤたしかにでございます日本魂といふ意地がございます我どうとき天皇陛下が明治廿三年十月三十日に下させられました勅語にたしかにおしめしになりました即ちかやにには孝行兄弟はなかよくしともだちにしんせつまふうふ中よくしてくにのためきみのためにちからをつくし上御一人のおんこゝろと下千万人のこゝろがかつたいしてくにのひかりをかゝやかしたるは國体の精華じや國のゝなじやと仰せあそばしましたでざ

りましやう しかるに がくもんは 日に〳〵 すゝみながら
日本魂と いふ 日本の 意地 日本の まんのねうち が よわつて
きまして われ〳〵 人民の 神事の長 と あふきたてまつるべき
とうとき 天皇陛下 の 御影 に むかひまして おそれ おはく
も しつれいな こと を まて だつそう したり 外人 に
土地の うり かひ を 周旋 したり して 法律 を やぶる 人
が たび〳〵 しんぶん など で 小言 を いはれ て をりま
す が これら は 雪に こうさん した いぢのない うめ も
同然 で 神國人 の 意地 を うしなふ た 人 では ござりま
せんか また われ〳〵 信者 ゝ とうとき 神の おしへ に よ
りまして まこと の みち を ふみ おこなふ ものです から
信者の 意地 を うしなはず 神國人 たる 意地 を うしなゝぬ
よふに つとめねば なりませぬ この こゝろ がけ で おりま

したら 神 は かならずゐれ〳〵 を おまもり 下さるで ござり
ませう

まどにきをつけよ

どんな 家 でも まど の ないもの は ござりませぬ まど
は なに の ため に つけて ござりますかと 申ます と い
ふ まで も なく ひる ゝ その まど から 日輪のひかり を
うけ あかり を ひき いれ て しごと を する べんり を
とり 又 人間 に なければ ならぬ 空氣 を かよわせる
ため で もし 家に まど が ゐ とき に ゝ その 家の 中
は まつくら で しごと は できません し 空氣 が きたのう
なり まして 大きに からだ を がい します から まど は
せひ なければ なりませぬ サテ まど ゝ この くらひ やく
に たつ もの で なけりや ならぬ もの で ゝ あります け

れども よく この まど に き を つけ ません と 雨が
ふりこんだりして 家の内 を ぬらし たり 風が ふき こみまし
て 家の中のもの を ふき ちらし たり とばしび を ふき け
したり とき に より ましてい 盗賊が しのびこんだり して
とつて ゆく こと が ございます から よく まどに きを つ
け ません と いけません 人の からだ にも 又家の ように
まど が ちやん と つけ て ございます この まど は みの
内 即こゝろ を てらして 善とか 悪とか 美しいとか きたない
とか を みわける ように いろ〳〵 の ちゑ を はいらせ ま
す まことに おく ては ならぬ もので ございます 人の から
だ に ついて ある まど い ま と いはず しまして 目と
か はなとか みゝとか それ〳〵 なまへ が ちがふ て ございり
まして 人が いろ〳〵 の もつて ゐる ちゑ は みな この

まど から はいり ます スベテ 人間が はじめて うまれ まし
た とき い なんにも しりません が いろ〳〵 の もの を
この まど から みたり きいたり いたしまして 善悪邪正 を
しります ので この まど が 一ツ でも 不足 いたします と
一人まへ の もの とは いはれませぬ おはなし を きいて
ゐる あいだ は みみ といふ まど の 戸 を あけて おかね
ば ありません よふ な もの で みな この いろ〳〵 の ま
ど が ございまして この まど の 戸を あけたり しめたり い
たします のに よはど き を つけねば なり ません この
まど に き を つけん と ゆだん いたします と あめや か
せ よりも もつと おそろしい もの が ねらふて おります か
ら 善悪邪正を みわける こゝろ の ひかり を ふき けしたり
いたします い 申すまでもなく この おそろしい あくま が

いいりまして神さまより 已けていたゞひてある本然の善と いふけつこうあたまをぬすみとります このちはどこにでざりましやう神さまのたまものをぬすまれてあんと申わけがでざりましやうかの人がねしづまつてからへいをこゑたり人のやねのうゑにかゞんでゐる人人はこの本然の善をとられてしまいましたのですむかしの道歌にくらがりが見てあるとも しらずしてたからとられにはいるねすびと

よくといふあくまのために本然の善といふたからを とられることをしらずしてくらのなかのしあものをよいたからとこゝろあているまちがいをよんだもの

ですソシテこのあくまはいつでもついてアワよくばはいろうといたします からきをつけてをりませぬと おはそうどうがおこります にうりやのかゞをとをります

とさかゐをやいてゐるにはいがするアアうまいかざがするうなぎかしらんなんぞと心がそこへはしるとゝもうあめがふり込かけてございます くしこうがいやかんざしやわげくゝりやねがけをみます とはしいナアとおもひますオットかせじやと障子をしめるようにきをつけますと本然の善といふたからにひとつもさわりませぬがよくようじんしませぬといろ〳〵のあくまがまどからのぞいてゐますからときによるとおや兄弟にかくしてよくないことをいたします 家のまどからはいる雨や風やぬすびとは一ぺんはいりま

しても氣さへつけますればもう再とははいりませんけれども人間のまどからはいりましたものは一度はいりましたらもうしかたがでざりませんよはどのあらいものかあしやくもなくおもてむきで出入いたしましてふせぐことがよはどむつかしいことでござります(かのはらい)とかあくまはらいといふことはかたばかりのこつてかんじんのこゝろがないことで)只なにかなしに神のたすけをねがひ心たゞしくして目口鼻のまどにきをつけねばあらぬことゝぞんじますなんでもせつかく神さまからふじゆのないよう心のくらくあらぬやうにとしせんにあけて下さつたけつかうなまどでざりまするからこのまどより一切わるものを通行さ

ときゝあくまはあんりよ

せてはありませぬよきことならばサッ〳〵と奥坐敷へ通えてやつてすぐにげて歸らぬやうに留かねばなりませぬ

(慈悲の德)　あさけは人のためならずとうとき神のをしへをうけ神のめぐみをうけてをりますわれ〳〵信者が御互にはなしをいたしたり御話をきいたりいたしまして人間の道神のをしへをおさめますのもまことにありがたいことでざります今こゝろみに平手で石をたゝきますにかるくソーットうちますればあまりこたへませんけれどもきつく石をうちますれば手はちぎれるはどいたむでざりましようこのようにかるくうてばいたみすくあくきつくうてばいたみのひどいのゝどういふものでざりましやうものにゝすべてかへしといふものがざりましてたいきなも

の、かへしは大きく小イさいものの かへしはちいさく
多くの かへしゝ多くて すこしの かへしは すこしで
せんの かへしゝせんあくはあくでこのむくい
はめつたゑくるはぬことで六かしく申ますと因果の道
理と申ますよのことわざになさけはひとのため
あらずといふことがでざりまして あさけをかけるの
はけつしてわがみのためわがみのとくをめあてに
さんようづくめにするのでございませんけれども因果
の道理ゝきつと人にはどこしただけのかへしをいた
します即ち因果の道理とは神のしはいしたまう一の道
理です勿論なさけをかけてそのむくひをのぞむのはな
さけのかへことをするのでそんなものはあさけと
いふことができませぬがあんじゆうあひとを見て

あはれみのこゝろをおこしサヅカシふじゆうであら
うとわがみにひきくらべてたすけるこゝろがひとり
できましてたすけるのでそのたすけていますあいだはそ
んとくのかんじようどころでゝでざりませんかわいそ
うなかわいそうなといふ心でほかのかんがへはあ
かゝでませんこれがなさけと申すものでございますいつ
のころでありましたが加賀國に長藏といふれうしが
ございまして夫婦の中にことし十三歳になる松藏とい
ふ男の子をもつておやこ三人むつまじくくらしておりま
したが或日天氣がよくてなんともいへぬ心もちでざ
りました から長藏はたゝひとり小舟にのり陸路はるかに
こぎだしました白山や大日岳のいたゞきがかすかに見
へむかうはまんゝたる海でいつもなみのあらい

北國のうみ　ながら　今日ばかり　は　なみ　も　なく　まことに
しづかで　ございました　から　長藏　は釣を　たれ　たり　綱を　お
ろし　たり　して　たのしん　でおりました　が　はるか　むかふ　の
そら　より　二むらの　くろくも　が　見へて　くるヨ　と　思ふ
うち　そら　一めん　に　かきくもり　ました　いつも　海邊ま　ゐる
長藏　です　から　日和のぐあい　雲のでいり　は　じうぶん　知て
ゐます　この　ありさま　を　見るなり　サテハ　ひどい　しけじや
と　おもひ　まして、そう〳〵　漁の　道具　をしまい　まして　い
のちかぎり　に　舟　を　こぎかへ　ました　けれども　くろぐも
は　モハヤ　そう　一めん　に　なつて　小雨になり　おそろしい　風
が　白波を　けたてました　舟は　小さい　風は　きつい　波は　北海
のあらなみ　です　から　たまりません　ゆり上られ　ゆり下ろされ
潮は　舟の中　へ　はいり　ます　長藏は　氣丈な　男　です　なかな

かの　難風でさへ　ものとも　思はぬ　人です　から　心に　神の　た
すけ　を　ねんじ　一生けんめい　に　舟　を　こぎました　が　一間
こいでは　五六間　ながされ　二間　こいでは　八九間も　ながされ
いたしまして　とても　陸へ　近づく　ことが　できま　せん　いま
は　力も　はりも　ぬけて　しまい　ましたが　ひとしきり　うちよせ
る　あらなみ　に　ろも　かい　も　とられて　しまい　ました　家に
のこりました　母と子は　にはか　の　しけ　に　おどろき　まして
夫の身の上　父の身　を　こゝろ〳〵　に　とやかく　と　あんじ
まして　はやく　風やめ　そらはれよ　なみしづまれ　と　いのつて
をりました　が　雨も　風も　やむどころ　では　ございません　いよ
〳〵　つよく　つのります　から　松藏も　いまは　たまり　かね　き
んじよ　の　漁夫　に　たのみ　じぶん　も　かひ〴〵　しく　人の
とめる　のも　かまわづ　のりこみ　あれに　あれたる　荒海　の　さ

かまくなみをおもてもふらずこゑいさましくこぎだしましたけれども舟はタヾ波にもまれるだけでろもかいもやくにたつものでナイすゝむも退くこともかなひません さすがの漁夫等もかないません から松藏を すかしなだめて申すにこのしけではとてもかゐわぬ ソシテ爺御のすがたとかふねとか見へてあればとも かくどこにゐるやらヱからぬのに目あてもなくむ ちやくちやにゆきこのあらうみのもくづとなるよ うなことがもしあつたらゝ御のなげきいかばかりぞ といさめなぐさめ舟をどうやらこうやらこぎかへしま した松藏はよさなく舟へかへしあがら心ゝとをく沖の 中にでざります たゞボンヤリと空をあがめはてはは くやしなきにあきだしまして この風エヽこの風がおれが

大人であつたら一人でもゆくのよナセもつとはや う生れゐんだやらこのかひなるがエヽやくにたゝぬこの はそいかひながが力なきのこのかひなくるは ぬばかりのあげきコノしけアノ熊五郎どのさへかなは ぬといふたこのしけでは父さんもと濱邊の砂にか はをうずめてかゐしみましたが漁夫等ゝは、御の あんじもあらうからはやくいね爺御ゝこのへんの 名高いれうしやものに無事にかへらしやるゝうけあいじ やおまへがこのしけにゐてもしもあやまちあつて は母御になんといひヱけができやうサア〳〵いね〳〵 といはれてあめとなみだにしたゝる袖をしぼりかぬつゝ しは〳〵とヱがやへかへりましたは母はわが子のかへつ たのを見てはしりいでヨウヤアかへつたヨウかへつて

くれた　父さん　は　舟のり　も　上手ゆへ　こんな　しけ　ぐらい
に　きつと　へいき　で　ござる　ナニ　あんじるに　およばぬ　お
と、しの　あらい　しけ　に　熊おぢ　が　こまつた　のに　のりき
つて　かへらしやつ　た　ことを　おもふて　みよ　ナニ　この　しけ
ぐらい　が　と　あんじる　見がこ　を　おぐさめよう　とて　以前
の　ことを　いひきかし　まして　いろいろ　と　なぐさめ　ながら
心の中　には　十年このかた　ない　しけじや　のに　どうして　ゐ
るか　と　おつとの　身のうへ　あんじる　のゝ　だれも　おなじこと
です　から　口には　平氣らしい　ことは　いひながら　も　その
こゝろの中は　おしはかられ　まとに　あはれで　はでさりませんか
サテ　日もくれて　だん〳〵　と　じかん　の　たつ　に　したがひ
まして　風も　だいぶ　ないで　きました　から　松藏母子の心も
あんじ　の中　にも　すこし　おちつき　まして　イマか　今か　と

夜どをし　父の　かへり　を　まちわび　きんじよ　から　おり〳〵
たづね　に　くる　人の　はあし　に　心を　なぐさめ　ついに　夜を
あかし　ました　が　もう　風ゝ　ちやん　と　やんで　日は　かん
〳〵　と　てりかゞやき　きのふ　の　ひる　から　白浪　おどりあが
つて　あつた　荒海も　けふゝ　波も　しづか　で　はるか　の　おき
に　とんで　ゐるかもめ　も　一イニウ　と　かぞへ　られる　くら
いで　はまべ　には　きのふ　うちよせ　た　あらゐみ　の　あと
が　たんだら　すじ　を　のこしたのは　松藏が　あしずり　して　こ
ぼした　あみだの　あとかと　おもふばかり　です　松藏は　よのあけ
る　のを　まち　かね　て　人がはの　見へるか　見へぬ　ぐらい　に
モウ濱邊に　出て　向ふを　ながめ　て　ゐました　が　ナニ　一つ
目に　さへぎる　ものゝ　ござりません　見へるものゝ　ましろ
な　かもめ　が　波の上に　たはむれ　て　ゐる　だけ　です　松藏は

あみだのために かすんだ 目を すりながら 沖を 見つめ
口の中に アノかもめは かもしろ そうに とんで ゐるが
親も子も 一しよに あそんで ゐる やらう そこから 父さ
んの 舟は みへぬか アヽ 父は マダ 歸らぬか もしや
ゆふべの とちいさい むね に みちみちたる かなしみを
かはと 目とに あらはして おりましたが そうッと 下ての
方から 漁夫が 松さん 爺御 は かへらしやつたかと いひな
がら あるいて きまえた 松藏は 力ない こゑ を うる まして
マダ……たゞ 一言 いふて 涙を ぽろ〳〵 と こぼしました
松さん あくナ 己はノ 爺御の ことを いふて やらふと
おもうて 來たが 御前の ように ないては 己も いはれぬ
わいと 申ました 松藏は 爺御の 一こと きゝます あり すぐ
漁夫の そばよ すすみ より 父さん に おまへ あひあさつた

か 父さん を 見たか 父さんが たつしや で ゐたか どうぞ
いふて 下され きかして 下され と やも たても たまらぬ
よふに いひました が 漁夫 は いそぐ 松藏 を なだめて
己は 今日 夜が明ける あり すぐ こゝへ きて 波にうち あげら
れた ものを 見に きた が いろ〳〵 の ものの ある 中
に と いふのを また ず 松藏ハ そんなら 父さん は 波に う
ちあげ られたのか しんでか いきてか どこに 父さん の しが
い が ある つれてッて と また たゝみかけて とひます が
漁夫は モシ〳〵 として イヤ 爺御は うちあげられて ゐぬ し
んでも ゐぬ ソンナラ 父さんハ と あんじ とふ 松藏の かは
を 見つめ ぽち〳〵 と なみだ を こぼし アノソノ エー
なんじや ソノ と いひにく そうに して いはふ と して ハ
いひかねついには これを 見よ くるしい くるしい と いひあが

らなにか　二つ　ばかり　松藏の　前へ　はりだして　一散に　はしり
ゆき　ました　松藏は　ふしぎ　に　おもひ　おちたる　もの　を　ひ
ろひ　ました　その　二しゃ　は　楫のおれ　と　かつぱの　たゞこ入
です　松藏ハ　一さん　に　わがいへ　さして　はしり　かど口　ま
でくるが　いなや　母ア　父さん　は　といふ　なり　そこ　へ
たをれ　ました　氣が　つかぬ　よふ　に　ありまた　それも　その
ハづ　です　かの　二しゃハ　長藏の　所有品です　見覺ある　ち
ゝ　の　もの　です　ぬしが　かへらず　して　この　品々が　かへり
ました　しかも　はまへ　うち　あげられ　て　あつた　の　をみ
れば　長藏の　身の上ハ　申まで　も　ございません　漁夫が　い
ひにく　がつた　のも　松藏が　きせつ　いたしました　のも　わかり
まして　ございましよう　母は　松藏の　ありさま　を　見て　おどろ、
き　ました　しばらく　して　松藏は　いき　ふき　かへし　ました

母子の　ありさま　ハ　どうで　ございましよう　その　ありさまは
ゐたくし　の　ような　口不調法な　もの　には　いへる　ことで　で
ざりませぬ　その日　より　松藏は　一人の親の子　と　ありました
この不幸　ある　母子が　日に　日に　おせん　に　むかひ　ます
たび　に　長藏の　事　を　思ひ　だして　は　いつも　なみだ　の
あめ　に　四つ　の　たもと　は　ぬれて　ございます　きんじよ　の
人も　おり〳〵　ハ　おぐさめ　かね　て　とも　に　はな　を　つ
まらせ　て　おりました　が　月や　日ハ　この　母子の　かなしみ
に　とんじやく　おく　はやくも　たち　まして　松藏　ハ　十四才
とあり　十五才　と　なり　今ハ　はや　しつかり　して　一人前の
漁夫　にあり　ました　父おや　を　失ふた　に　つけて　は　おに
かに　くろう　を　いたします　から　とし　に　にはわぬ　しつかり
した　もの　と　なり　ました　ちやうど　松藏が　十七歲と　あり

ました　とき　の　あき　ひどい　しけ　が　ございました　松藏は
以前の　しけの　こと　を　おもひだして　このしけ　が　あければ
父さん　も　たつや　に　おらるゝ　ものを　おれも　この　くら
い　大きイ　あつたから　よろこんで　もらへる　もの　を　と　おも
ひ　ながら　濱邊へ　出て　沖の方　を　ながめて　おりました　が
はるか　の　沖の中　に　たすけ　を　よふ　しるし　の　あげた
蒸氣船が　ブーブー　と　氣笛　を　ならして　波に　たゞよ　ようて　お
ります　松藏　は　このありさま　を　見て　舟を　だして　すくい
に　ゆこう　と　おもふて　ゐる　ところ　へ　血氣の漁夫等　一艘の
舟を　出して　救ひに　ゆきました　松藏も　母の　ゆるし　を　う
けて　この舟に　のりこみ　ました　母は　松藏の　いさましい　あり
さまを　見て　うれしい　やら　又　かなしい　やら　長藏どの　が
ゐたら　よろこばう　のに　と　おもへば　松藏　さまをし　ます　にい

父さん　は　しけで　おくあられた　その人の　子　が　いま　なん
せん　を　すくひに　ゆく　のじや　から　かあらず　まづい　こと
を　すな　父をうしなふた　かなしさ　を　おもへば　あの舟の中　ま
ゐる　人の　子も　わたしら　が　あふた　ような　めにあうかも
しれぬ　かならず　はね　を　おしむな　母の手に　そだてられた松じ
やもの　と　いはれぬ　ように　はたらけと　はげまして　濱まで　お
くつて　やりました　たすけ舟　は　すべて　二十人　の　のりこみ
です　みな　おばへの　ある漁夫等です　もろぐへ　たかく　あらなみ
を　おしきつて　すゝみ　ました　松藏の母　は　家へ　かへりまして
あんじる　わが子の　みの　うへ　やりは　やりました　ものゝ　風
もつよく　ふきます　から　このかせ　では　とても　吾身だけ　かへ
る　だけ　むつかし　からう　と　女心の　一すじ　に　神の御守り
を　いのつて　おりました　コレにつけても　おやの　おん　なか〳〵

おろそかにおもふてゐるありません　そういふ　うちに
日は　くれました　風は　なかなか　やみません　戸も　障子も　ふき
はづす　ばかりの　かせです　から　わが子の　身が　あんじ
られます　どうぞう　と　ふき　あれる　風となみ　ブウブウ　なる
じようきの　ふゑが　耳を　つき　ぬく　ばかりに　きこへます
ソレも　しばらくの　中で　笛が　きこへぬ　よふに　なりまし
た　おりから　にわかに　表の方が　どやどや　と　さわがし　なつて
きました　トントンと　戸を　たゝく　おとが　して　漁夫の　こゑ
が　しますから　はねおきん　ばかりに　おきて　をもての　戸を
あけました　漁夫等　は　くちぐちに　おふくろ　今　かへり　まし
た　皆ぶじで　かへり　ました　今日の　松さんの　はたらき　だれ
も　かんしん　しました　さすが　ゐ　長さんの　子　じや　えらい
てから　じや　と　いふて　ゐました　が　松蔵は　みをの　あとか

らおくれば　せ　よ　げんき　よい　ふう　で　一人の　つかれたる
人を　かた　に　かけ　人々に　はめそやされて　戸口　に　いりまし
た　母ア　今かへつた　神さま　に　御禮　申して　おくれ　この　御
方　を　たすけました　かゝいた　さもの　を　出して　下され　この
御方に　させて　下され　と　申ました　母は　うれしさに　うろ〳〵
として　客人に　さもの　を　きかへさせ　いろ〳〵いたゝり　なん
せん　のもよう　その人の　くに　ところ　などを　とひ　あに心　あ
く　その人の　かは　を　しづと　みますれば　ふもひも　よらぬ　長
藏です　四年まへ　の　しけに　死んだ　と　おもうて　ゐた　父の長
藏です　まことに　ふしぎな　ことです　他人を　たすけようと　思ふ
て　父をしんだと　おもう　父を　たすけ　ました　世の中に　こんあ
ためし　ゝ　いくらも　ございます　これゝ　人がしよう　と　ふも
うて　できること　で　あい　母子の心が　神に　感通した　からで

ございましょう　人は　しりません　けれども　神は　たしかに　しつて　ございます　ちがいありません　もし　松藏が　わがみの　不仕合を　もつて　人の　不仕合を　おもひやらず　たすけようも　ゆきませなんだ　ときには　あるひは　長藏を　たすけることが　できなんだ　かも　はかりません　すべて　人は　なさけ　といふ　ことを　わすれては　人たるねうち　人たるかひが　ありません　神の道をまもるわれ〳〵　信者は　なさけと　いふことを　心がけねば　なりませぬ　なさけと　申しても　大金を　出したり　あぶなひ　ところへ　人を　たすけに　ゆく　だけでは　ございません　みちのまん中に　いしの　ころげたるのを　みちのはたへ　よせたり　あめの　ときは　るいみちの　上に　ふるむしろを　おいて　通行を　便利に　したり　するのも　なさけの　一つです　はれ〳〵が　いきてゐる　のも　おしへを　うける　のも　みな　神の　御なさけ　で　ございます

勅語にも　博愛衆に及ぼし　と　宣はせ玉ひまして　なさけ　の　心を　うしなうな　と　仰られ　ました　情の心　あいもの　は　人では　ございません　御互に　なさけの心　なさけの　おこない　を　まもらねばありません

敬神訓蒙　説教道の話後篇上之巻　終